

## 英語授業実践力の分析(1)

島根大学教育学部 築道 和明

### 1 はじめに

英語教師に求められる授業実践力とは何か。この点に関する2つの論をみてみよう。

柳井(1990)は、英語授業力を①教科指導力と②授業展開力の2つに大別している。教科指導力とは、当該教科に固有の指導力を指し、一方、授業展開力とは、教科にかかわらず授業を有効に進めるために必要とされる基本的指導力と定義されている。新出言語材料の導入の方法やパターンプラクティスの方法などは、教科指導力にかかわるものであり、全員参加の学習を成立させる手だて、机間巡視に基づく指名、などが授業展開力の例として挙げられている。

一方、金田(1987)は、授業実践力を3つの階層に分けてとらえている。すなわち、①メッセージ(教科内容)を豊かに、正確にもっていること(英語について正しい深い認識を有していること)、②そのメッセージを最適のコードにのせることができること(伝達のための方法、手だてに習熟していること)、③そのコードを効率よく受け手(学習者)に届くようにチャンネルを設定できること、といった3つの力である。

本研究では、これらの論を参考にして英語授業実践力を大きく2つに分けてとらえることにする。つまり、「英語授業設計力」と「英語授業展開力」の2つである。英語授業設計力とは、教材内容を吟味し、授業プランを練る力、また、授業実践に基づいて新たな授業を再構築する力と定義する。また、英語授業展開力とは、教壇に立ち、学習者を前にして自ら設計した授業プランを実現し、あるいは軌道修正していく力と定義する。

### 2 目的

本実践研究では、以下の2点を最終的な目的とする。

- (1) 「英語授業展開力」とは何かを具体的にとらえること
- (2) (1)で明らかにされた「英語授業展開力」を養成する方策を考えること

### 3 データ収集の方法

英語授業展開力を具体的に把握するためには、前述した「英語授業設計力」という要因をコントロールする必要がある。そのための1つの方法として、ここでは、教育実習生(以下、実習生と略す)と指導教官が同じ学年を同じ指導案に基づいて授業を行う、というアプローチをとることにした。<sup>1)</sup> 2つの授業に違いが生ずるとすれば、それは「英語授業展開力」の差に起因するものであるという前提にたつのである。

具体的には、表1に示したように2回の授業(4つの授業)を一台のビデオカメラにより

教師行動を中心に録画した。次にビデオ録画を授業記録の形で文章化し、両者をあわせて分析のための基礎データとした。

2回の授業実践を分析の対象とするのは、次の2つの理由による。第一に、1度だけの授業では、クラスの雰囲気というものが授業の成否に影響を及ぼす危険性を排除できないからである。<sup>2)</sup> また、一人の実習生と指導教官との比較では、実習生の個人的な資質と実習生に共通する一般的な傾向とを区別できないからである。

こうした点から、1回目の授業実践は、クラスAを実習生が、クラスBを指導教官が行い、2回目は、クラスを入れ換えてクラスAを指導教官が、クラスBを別の実習生が授業をするという手順をとった。なお、いずれの授業も指導案は、実習生が作成したものである。また、指導教官は、14年の教職経験を有し、そのうち附属中学校に7年勤務している。

	クラス A	クラス B	言語材料
授業実践①	実習生 (1)	指導教官	現在完了形
授業実践②	指導教官	実習生 (2)	that(接続詞)

表1 分析のための基礎データ

#### 4 分析方法

##### 4.1 量的分析

金田(1984)に提案されているCARES-EFLに基づいて、4つの授業の全体像を量的に把握する。<sup>3)</sup>

##### 4.2 質的分析

文章化した授業記録、およびビデオ録画に基づいて、指導過程ごとに分析する。

本稿では、まず2回の授業の全体像を把握する。次に1回目の授業実践にかかわって指導過程別の時間配分などから実習生と指導教官との授業を比較する。これらに基づき、「英語授業展開力」に迫る糸口を明らかにしたい。

#### 5 結果および考察

CARES-EFLによる分析結果を表2に示す。

	1回目		2回目	
	実習生	指導教官	実習生	指導教官
・教師発言率	56.40	56.64	40.67	44.13
・生徒発言率	17.65	22.56	30.94	29.30
・沈黙/混乱率	25.95	20.80	28.39	26.57
・英語使用率	70.08	79.91	81.29	82.07
・日本語使用率	29.92	20.09	18.71	17.93
・教師英語使用率	63.45	74.56	67.84	71.77
・生徒英語使用率	91.28	93.33	98.97	97.57
・英語制限応答誘発率	50.00	45.40	34.68	35.58
・英語制限応答率	97.06	84.52	60.94	65.98
・教師英語コミュニケーション率	50.00	54.60	65.32	64.42

・生徒英語非制限応答発話率	2.94	15.48	39.06	33.20
・教師支配率	<u>84.03</u>	<u>74.56</u>	<u>87.06</u>	<u>79.30</u>
・生徒非制限応答発話率	11.41	21.11	39.69	35.63
・相互作用停留率	48.34	39.85	45.30	44.25
・英語発言停留率	24.96	24.05	22.49	22.46
・教師発言持続率	36.73	36.59	25.52	25.39
・相互発言率(教師→生徒)	<u>11.26</u>	<u>14.41</u>	<u>8.13</u>	<u>12.69</u>
・相互発言率(生徒→教師)	<u>11.85</u>	<u>16.42</u>	<u>8.61</u>	<u>14.00</u>
・相互発言率(生徒→生徒)	5.45	5.76	21.53	15.18
・沈黙・混乱移行率	<u>34.72</u>	<u>26.82</u>	<u>36.20</u>	<u>32.74</u>
・教師発言の多様性	<u>43.00</u>	<u>53.00</u>	<u>27.00</u>	<u>35.00</u>
・相互発言の多様性(教師→生徒)	<u>10.00</u>	<u>16.25</u>	<u>13.75</u>	<u>21.25</u>
・相互発言の多様性(生徒→教師)	<u>10.00</u>	<u>20.00</u>	<u>12.50</u>	<u>27.50</u>
・生徒発言の多様性	4.69	4.69	10.94	7.81
・沈黙・混乱領域の多様性	46.05	55.26	46.05	42.11

表2 教育実習生と指導教官の授業発言比率 (CARES-EFL)

1回目の授業において、「生徒英語非制限応答発話率」に大きな違いがみられる。その理由としては、後述する指導過程の「復習」の段階での活動の違いが考えられる。つまり、復習の活動として実習生はポイント部分の日本語訳を、指導教官は、英問英答を行っているのである。(この部分については指導案に具体的な内容が記述されていなかったという不備があった。)

1回目、2回目に共通して実習生と指導教官の授業に違いがみられる項目がいくつかある。表2の下線を施した項目である。これらから次のことが言えよう。

- (1) 実習生の授業には沈黙・混乱が多く、かつ長い。(沈黙・混乱率/移行率)
- (2) 指導教官の方が英語を多用している。(教師英語使用率)
- (3) 実習生は教師主導型の授業を展開した。(教師支配率)
- (4) 指導教官の授業では生徒とのやりとりが多く、かつ内容も豊かである。(相互発言率)
- (5) 指導教官の発言は多様である。(教師発言の多様性)

(3)、(4)、(5)は相互に関連している事柄と考えられる。実習生は、①生徒との相互作用を図る具体的な手段に習熟していない(教師発言の多様性の低さ)→②相互発言率が低くなる→③その結果、説明・指示中心の授業を進める(教師支配率)、といった悪循環に陥ったと言える。

実習生の授業を特徴づける相互作用の低さや沈黙・混乱率の高さ、などについては、既に先行研究において指摘されている(例えば金田1984)。同一の指導案に基づくという制限を設けた本研究においても同様の結果になったということは、すなわち、「英語授業展開力」の中核がこうした点にあると予想できる。

この点を明らかにするためには、実習生の授業のどの場面で、どのような形で沈黙・混乱が生じているのか、その原因は何か、また、指導教官は、どのような場面で、どのような形で生徒との相互作用を図っているのかを分析する必要がある。この点については、稿を改めて報告することとし、以下では、1回目の授業の主たる教授・学習活動に費やされた時間

を中心に実習生と指導教官の授業を比較する。この点をまとめたものが表3である。

教授・学習活動	教育実習生	指導教官
①復習（音読）	4分28秒 個人→指名音読	2分40秒 指名音読
②復習（内容理解）	3分21秒 日本語訳	3分44秒 英問英答
③聞き取り	11分23秒 <u>そのうち、概要の聞き取り</u> 5分27秒 テークリスニング4回	10分48秒 <u>そのうち概要の聞き取り</u> 3分29秒 テークリスニング6回
④新出単語の練習	6分26秒 <u>そのうちoverの説明</u> 4分16秒	5分41秒 <u>そのうちoverの説明</u> 1分54秒
⑤音読	3分3秒 指名音読	3分24秒 一斉音読→個人練習
⑥内容理解（訳）	1分36秒	2分17秒
⑦音読	1分43秒 一斉音読	2分17秒 指名音読

表3 指導過程別の所要時間と主たる活動内容（一回目）

①の復習段階の音読で両者に差がみられるが、これは実習生の場合、個人練習に1分費やしているため、その点を差し引いて考えると両者の差はそれほど大きなものとは言えない。

活動に費やした時間という点からすれば、③聞き取り練習（特に概要の聞き取り）と④新出単語のoverの説明、の2点において実習生と指導教官の授業に相違がみられる。その一因としては、この実習生の間延びした話し方も影響していると考えられるが、それ以外に、発問や説明の提示の仕方、板書の提示の仕方などの違いも原因として考えられる。

本研究で用いた指導案は、教師の発言について一字一句コントロールしたものではない。教授・学習過程の流れを統一し、主たる発問や指示、説明を一定にした、という意味での「同一指導案」である。例えば、概要の聞き取りを指導過程のどこに位置づけるか、また、概要の聞き取りを促す指示、発問はどのようなものにするか、という点では、実習生の授業でも指導教官の授業でも同じなのである。従って、実習生と指導教官との時間的な差は、発問や説明などの内容の違いから生じたものではなく、むしろ発問や説明の伝達の方法や、発問、指示などに対する確認の仕方といった点に原因があると考えられる。これらの点から授業データを詳細に分析することによって「英語授業展開力」にも迫ることができると思われる。

注

- 1) この実践研究は、千葉大学教育学部附属中学校の大鐘雅勝先生のご協力により実現できた。ここに記して感謝申し上げます。
- 2) 詳しくは、北尾・速水（1985）を参照のこと。
- 3) CARES-EFLの分析に関しては、貴重な資料と助言を山口大学教育学部、金田道和先生よりいただいた。心より感謝申し上げます。

参考文献

- Brumfit, C. & R. Rossner, "The 'decision pyramid' and teacher training for ELT." *ELT J.* 36, 4, 1982, 226-231.
- 藤沢伸介「経験の蓄積による教師の指導態度・技術の変化---授業運営のクラスタ分析」『跡見学園女子大学紀要』18号, 1985, 13-26.
- Kakita, N., "An Analysis of Classroom Interactions by the TEFL Student Teachers." 『広島大学教育学部紀要』第2部 32巻, 1983, 41-49.
- 金田道和「授業記録システム(CARES-EFL)の提案」『教科教育法の授業改善に関する研究』山口大学教育学部, 1984, 3-13.
- (編) 『英語教育学モノグラフシリーズ 英語の授業分析』大修館書店, 1986
- 「CARES-EFLによる教育実習生の授業の分析---言語比率に見る変容の一態(2)」『英語教育学研究』大修館書店, 1987, 414-423.
- 北尾倫彦・速水敏彦「教授技法の分析的研究---実習生と熟練教師を比較して」『大阪教育大学紀要』第V部門 34巻2号, 1985, 171-178.
- MacLennan, S., "Integrating lesson planning and class management." *ELT J.*, 41, 3, 1987, 193-197.
- 丸山敬介『経験の浅い日本語教師の問題点の研究』創拓社, 1990
- 向山洋一(1985)『授業の腕をあげる法則』明治図書, 1985
- Nerenz, A.G. & C.K. Knop, "Helping Student Teachers Maximize Class Time in the Second-Language Classroom," *CMLR*, 39, 1983, 840-845
- 野口芳宏・千葉木更津技法研(編)『子どもを動かす授業の技術20 +  $\alpha$ 』明治図書, 1988
- 野村幸正『知の体得---認知科学への提言』福村出版, 1989
- 恩藤周典・藤森和子「英語科教育実習生の教授行動の分析(2)」『岡山大学教育学部研究集録』63号, 1983, 17-123.
- 小篠敏明「英語科における形成的評価の分析的研究---熟練教師と非熟練教師の授業比較を通して」『広島大学学校教育学部紀要』第I部 10巻, 1987, 113-120.
- Peck, A.J., *Language Teachers at Work: A description of methods*. Prentice Hall, 1988.
- Richards, J.C. & D. Nunan (eds.), *Second Language Teacher Education*. Cambridge Univ. Press, 1990.
- 佐伯胖他『すぐれた授業とは何か---授業の認知科学』東京大学出版会, 1989
- 斎藤喜博『授業の展開』国土社, 1964
- Widdowson, H.G., *Aspects of Language Teaching*. Oxford Univ. Press, 1990.
- 柳井智彦『英語授業の上達法』明治図書, 1990
- Yoneyama, A., "The Treatment of Learners' Errors by Novice EFL Teachers." 『新潟大学教育学部紀要』第23巻, 1982, 85-94.
- 吉田一衛「ベテラン教師と教育実習生の英語授業分析---Pauseを中心にして」『紀要』8号, 1980, 九州英語教育学会, 90-96.